
season and sweet?

サイルレン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

season and sweet?

【Nコード】

N2125S

【作者名】

サイルレン

【あらすじ】

四季とお菓子がテーマの短編小説集。甘かったり、苦かったり、それぞれの登場人物の恋愛を描く。

春とケーキ、又の名を「一目惚れ」

例年より早いのか遅いのか分からないような桜の開花。私は一人寂しく桜並木を歩く。

周りは幸せそうだよ、私には鮮やかすぎて目に悪いけど。

入学、入社、新学年。皆新しいことに浮かれ騒ぐ。

そして桃色の花卉が運んでくるのは、恋の季節？

私には関係ないわね。

特に新しくもない気持ちがある。一人はそりゃあ嫌だわ。

明るい色の季節に、灰色の人混み。正反対じゃないって、クスリと笑う。

香水の混ざった匂いに酔ってしまう、気持ち悪い。

そしてふらりと眩暈に犯されて、心行く先無いまま歩いている。

「あつ、ごめんなさい。」肩と肩が触れ合う。鼻孔を擽る香水の匂いは、なんとも言えない爽やかな香り。今までの不快な匂いを消していく。

「すみません。」軽く頭を下げて顔を上げれば。

……運命の人よ。

キザでベタなお決まりの展開と台詞も似合ってしまうシチュエーション。

影になった顔が、微かに笑うのを見つける。そんなクールな笑顔も似合う人なのね、彼って。

私も咄嗟にクールを装う。見つめてたなんてバレたら恥ずかしいわ！一目惚れなんて画面の中の話よ。そう思ってたのに、違ったみたい。

ぎこちない会釈を交わした私達は、何事も無かったかのように反対

の方向に歩き出す。それと同時に時間も動き出したようだった。

そう、一目惚れなんてそこで終わりよ。交わったように思われた線は、実は掠っただけなんてね。悲しいにも程がある。

だから始めから期待も恋もしないようにしていたのに。

今でも鮮明に描けるあの困ったような笑顔。それは今も色々な人に向けられる表情なんだろうけど。

「お店お願いね。」店長の言葉に頷く。やっぱりどこも同じ、一人なんだわ。

カランコロンとお店のベルが鳴る。甘い匂いが外へと駆け出ていく。「いらっしやいませ。」これまでの考えは横へやる。尻尾の先すら見えないように隠して、営業スマイルでお客様対応。

「このモンブラン下さい。」デジャヴ、こういうことを運命って言うのかしら？私の目の前には紛れもない彼。

「モンブラン一つですね？380円になります。」声が震えないように、気を配って対応する。緊張してるとか、恋してるとか、こんなことで嫌われたくないもの。

上手く営業スマイル出来てるかしら？たった一つだけのケーキを白い箱に詰めて、手渡す。掠めた体温に固まりつつも、私は使命を終えた。

「こないだはすみませんでした。」気付いてるのは私だけかと思っただけと違っただみたい。

「いいえ、こちらこそ……」

「ここで働いてたんですね。ここのケーキ、好きですよ。」

「ありがとうございます。」柔らかい笑みで話しかけられると辛いわ。余裕なんて無くなるもの。だけど余裕のあるフリ。

「また来ますね。」

「お待ちしております。」頭を下げて、再び視線を戻す。まともに顔を見ないように、若干目線は下げていたのだけど。

カランコロンとドアのベルが鳴る。気配と足音は去っていった。ケ―キの匂いにも負けない彼だけの残り香を取り込もうと、息を大きく吸った。

また来るって。微かに零れた笑みは隠さずに、外で舞う桜を見た。

今日は新作の桜のスイーツ、買って帰ろうかな。店長にひとつ、アドバイスしてこよう。恋する乙女の初々しい想いの味を。

やっぱり私は幸せだわ、私も周りの人間と同じように恋してるもの。

夏とアイスクャンデー、又の名を「デート」

振り返って彼を呼ぶ。

「あれ食べたい。」って可愛らしく言うの。そうすれば何でも許してくれる。甘い声と涙は女の常套手段。

そんな彼も数分後にはちゃっかり右手にアイスを持つてるんだから。青色が鮮やかなソーダ味。私のはオレンジ味。互いに互いのアイスを味見して、「美味しいね」って笑いあう。

こんな図は私たちだけじゃない。周りを見渡せば、皆そうしてる。カップルだらけの広場、彼らは空いたパラソルの下で強い日差しを避けながら物を食べてる。

ポタ、と溶け出したアイスが地面に染みを作る。服の上じゃなくて良かったって安堵。

舐めてたら早くは食べられないから、シャクシャクと音を立てて食べる。冷たさが齒に染みて、一気に涼しさが増す。

隣を見たら彼は既に食べ終わってて、私をにこやかな表情で見ている。た。

「何？」と聞けば、「何でもない」と答えるのだけれど。

「次はどこへ行こうか。」お店が建ち並ぶ場所。今はちよっとお腹いっぱいだから、私も彼も大好きなインテリアを見に行こう。その旨を伝えればまた受け入れてくれるの。

「良いね、行こう。」すい、と差し出された右手に、私の小さな左手を重ねてぎゅっと捕まえる。人混みが凄いから迷子にならないためね。

オシャレなラグやカップ、カーテン、ピローケース。

「色々あつて欲しくなっちゃうね。」

「本当だね。」二人のお揃いのマグカップでも買って使おうよ。うん。どれにしようか。

二人でお揃いの何か買うなんてこつぱずかしいけど、それもまた楽しいものだね。私は彼の楽しそうな横顔を盗み見て、少しだけ目尻を下げた。

時の流れは人の意思と反した流れ方をする。早くと望むときは遅く、遅くと望むときは早く。

もつと傍に居たいけど、それは無理らしいわ。ちょっと遠く離れた家に帰らなきゃいけない。

電車の中で今日のこと、今日の二人を振り返る。

「楽しかったね。」

「うん、お土産も買えて良かったよね。」

「今度それでコーヒー入れてあげる。」

「ありがとう。」きゅつと握った手は少し汗ばんで、解きなくなっただけど離れたくなかった。幸せはコーヒーの味なのかななんて思ったりしちゃってさ。

他にも、このときのおそこにいたカップルがどうのこうの、って下らない話を続けてた。それが帰宅時の私たちの楽しみ方だから。

それでもこの時間の流れも無情なの。すぐに終着駅で別れなきゃいけない。

「今日はありがとう。」そう言っただけは私に小さなキスを降らせた。

「こちらこそありがとう。」繋がっていた手はあと数分で離れ離れになってしまふけれど、声はまだ繋がっているから悲しまないわ。

「またね。」どちらともなく交わした次の約束は、今日彼が食べたソーダのような甘ったるい味がした。

先延ばしじゃなくて約束は果たされますようにって願いながら、私は家でもアイスクャンデーを口に放り入れた。

秋とコーヒゼリー、又の名を「別れ」

そういえば彼は甘いものが嫌いって言うてたっけ。肌寒い空の下で私は歩く。

最後の晚餐に相応しいわね、苦い苦いコーヒゼリー。右手のコンビニの袋には、二人分のそれ。

本当は至る所が嘘にまみれてるって知ってる。首筋の嘘も、好みの嘘も、愛してるの言葉の嘘も、全部知ってるわ。

それでも私は彼に踊らされ続けるの。それでも良いと思ってるから。でも違うのね、やっぱり辛い。

「いらっしやい。」他人の女の匂いが微かに残った部屋で、彼は優しく手招きする。でもそれも最後よ。

「久しぶり。」何もないかのように笑って、いつものようにソファに腰掛ける。彼は気が利く人だから、そっとマグカップをローテーブルに置いた。

「ありがとう。」

「外は肌寒かったでしょ？」柔らかく髪を撫でるその細い指にときめかないように、心を落ち着かせて飲んだ。ちよつとだけ甘いコーヒ。心や体がほんわりと温まった。

「美味しい。」そうやって私（や他の人）に優しくするから。皆騙されて離れられなくなるのよ。分かっててやるんだから、質が悪い。「良かった。」

「あ、後でこれ食べよう？」私はビニール袋を掲げた。中身を瞬時に把握した彼は、「じゃあ冷蔵庫入れておくよ」とそれを持っていった。

私は大人しくコーヒを口にした。テレビをぼーっと眺める。きつと彼は気付いているんだわ。私が別れを切り出すことを。意地悪く待っている。

（ほんと、最後まで意地悪なのか優しいのか。）

「模様替え、したんだね。」彼は狡いから、私に分かるようにそれをしている。白い花は、まるで身の潔白を証明したいかのよう。

（……嘘つき。）

「うん、配置替えして花を置いただけだけどね。」

「枯らさないでよ?」

「大丈夫。」クスクスと笑い、花卉に指を掛ける。外の寒々しい木々と違って、それは太陽の光を柔らかくに吸い込んでいた。そしてそれを見て彼が微笑んでいる相手は私じゃない。

いつ切り出そうか。斜陽が部屋を照らす中、私たちは何も言わずに隣に居た。

心地良い空間にこの気持ちを有耶無耶にされそうになる。触れるか触れないか、でもほんのり相手の温かさが伝わる距離。いつもの距離。

それも今日で終わりだって考えたら、泣きそうになって目を伏せた。「コーヒーズリー食べようか。」ああ、それが合図なのね。私と彼が終わる合図。それを食べたなら、私は別れを切り出そう。

「そうだね。」

「待ってて、用意してくる。」冷蔵庫からコーヒーズリーを出して買ったとき付けてもらったプラスチックのスプーンを置くだけなのに、大層なものを食べる気分だわ。

パクリと口に入れば、甘さと苦さが両方広がる。

「美味しい。」

そう先に零したのは果たしてどっちだったかしら? きっと彼よ、私にはそんな余裕無かったもの。

「ねえ?」

「ん?」

「もうお仕舞いにしようか。」やっぱりね、少しだけ困った笑顔を浮かべ、分かってましたというように肯いた。

本当は否定して欲しかったなんて知らないでしょ？知らなくて良いのだけど。私から切り出させるなんて酷な人。悲しそうな顔を偽らないでよ。優しいフリなんて非道いわ。

私の要らないもの、置いていくわね。殆ど使わなかった合鍵。この部屋には私の物は無いから、何も持って帰らないけど。

「ありがとうね。」

「こっちこそありがとう。」

最後に一つだけお願い聞いて欲しいの。

「何？」優しく顔で続きを促す。私は一度息を吸い込んで、”お願い”を伝えた。

「最後にキス、して。」

自分で言って、最後の響きに一粒だけ涙流したけどそれだけでやめる。泣きたくないわ、彼の前じゃ。

「分かった。」そう言って口付けたとき、苦いコーヒーの味がした。最後のキスは、色の無い秋の乾風の味だった。

冬とチヨコレート、又の名を「告白」

女の子が一年で一番緊張する日。甘ったるい匂いに世間は包まれ、苦い顔も緩い顔もそこらに溢れる。そして女の子も男の子も関係無く紙袋にいつぱいのお菓子を持ち歩く。

ああ、甘ったるいね。

「あんた、チヨコあげないの？」友達のその声に、苦笑いではぐらかす。本当はあげたいのも山々だけど、彼は沢山から貰えるもの。義理も本命も。今更私の本命が増えたところでどうともないはず。

「私はあげるよ。」

「頑張つて。」友達もこのイベントにかこつけて告白でもするらしい。私はただ微笑んでそう返す。

だって嫌だもの、騒いでる女の子たちと同じ紙袋に入れられて埋もれていくの。

「これあげるよ！」その輪に入る勇気が無い私。あの子らと同じように出来れば楽なんだろうな。

出来ないからね、でもあげたいから、放課後にそつと入れようかなって思うの。ああ、バレたときに恥ずかしいわ。

ことん、と小さく音を立てて机の中に入れる。どうか少しでもあなたが愛されますように。なんて心の中で語りかけて。

そして私はひっそりと帰宅する。

女の子たちの浮かれ騒ぎもあの一日だけ。次の日からは何も無かったように過ごすの。

特にクラス内で変わったこともないし、新たにカップルが生まれた様子も無い。取り越し苦労、杞憂、その他。

彼も以前と変わらない、毎年アレだから慣れてるのかもね。だから

私も忘れてたの。チョコなんてあげたっていう事実を。

馬鹿じゃないの？地味で目立たなくて、きやつきゃしてる友達の居ない私にそんなことしたら、他の女の子の視線が痛いじゃない。

私が彼にチョコを渡してから一カ月後のイベント。日本が作った下らない、私の嫌いな日。

「ねえ、良い？」漫画みたいな呼び掛け方。視線痛い、痛いから早く出ようよ。私は悪いことしてないからね？

「どうしたの？」私から渡しといてちよつと迷惑そうな顔で返事する。とりあえず教室から離れて特別教室へ。でも女の子たちの一部はそこら辺に隠れて聞いているんでしょ、きっと。

「こないだはチョコありがとう。凄い凝ってて美味しかったよ。料理得意なんだ？」ああ、意外だった？女の子らしくないと思ってたんだ。

「それは良かった。料理好きだよ。」なんだかんだで会話出来ちゃう自分凄い。緊張するかと思ったら意外に違ったみたい。

「そっか、それなら下手すぎて不味いかもしれないな。でも受け取ってくれる？」何それ女の子。彼が差し出したのは、可愛らしくラッピングされた箱。一瞬でお返しにチョコだなって分かるわ。私のより可愛いじゃない。

「ありがとう。でもどうして……？」

「好き、なんです。」馬鹿じゃないの？何で私なんか。嬉しい、でも嫉妬が辛いわよね。

「ありがとう。」本命だもの、拒否する理由があるかしら？

宜しくね、って右手を差し出せば、パツと明るく笑った彼がその手を握った。

ラッピングを解いて、綺麗に形作られたチョコを、ほいと口に入れる。甘い味が口いっぱいに広がって、この告白が現実味を増した。

「美味しい。」

「良かった。」彼の顔を覗き見たら、思わず照れてしまうような笑顔。これが現実なんだって、舌の上に残るチヨコの味に感謝した。

「好き、」

「え？」

「このチヨコが。」

「なんだよ。」

笑い合う。告白とチヨコのお返しに驚いたから、ちょっとだけ仕返し。

冬とチヨコレート、又の名を「告白」(後書き)

完結です。読んでくださった方々、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2125s/>

season and sweet?

2011年6月14日14時49分発行